

森友

SHINYU
vol.03

林業機械に万全のサポート体制

サービスカレッジ 林業機械コースを開講

住友建機では当社サービスマンを対象に林業機械の整備技術を専門にしたサービスカレッジを開講。お客様への満足度向上のため、さらなる技術向上を目指して取り組んでいます。

迅速対応の部品供給体制を確立

お客様からのオーダーへ速やかに対応できるよう、林業機械アタッチメントの補修部品を弊社部品センターに常時在庫。迅速かつ確実な供給体制を確立しています。



住友建機の林業機械 LINEUP



ハーベスタ仕様
SH120-5 25RHS mkII



ハーベスタ仕様
SH75X-3B 20RHS



ハーベスタ仕様
SH75X-3B 20SH



ハーベスタ仕様
SH120-5 25SH



ハーベスタ仕様
SH135X-3B 25SH



スイングヤーダ仕様
SH75X-3B



木材グラップル仕様
SH135X-3B



スマックス仕様
SH120LC-5SM



スマックス仕様
SH200LC-5SM

バックナンバー

SHINYU
vol.02



満洲林業
高知県
SH75X-3



西垣林業
奈良県
SH200LC-5SM



松阪地区木材協同組合
三重県
SH135X-3B



日和田林産
岐阜県
SH135X-3



秩父広域森林組合
埼玉県
SH75X-3B



三井物産フォレスト
北海道
SH120-3

Contents

林業現場レポート



上野物産株式会社

鹿児島県

SH75X-3B
KESLA 20SH



木材商秋田林業

徳島県

SH120-5
KESLA 25SH



長浜市伊香森林組合

滋賀県

SH135X-3
KESLA 25SH



有限会社竹田木材

石川県

SH135X-3B
KESLA 25SH



神子沢林業

山梨県

SH120+3
KESLA 25SH



株式会社よつばフォレスト

有限会社浅野産業

北海道

SH135X-3B
KESLA 25SH

林業機械に万全のサポート体制

住友建機の林業機械 LINE UP



企業として確固たる基盤を構築し、 民有林事業へ他の事業体に先駆けて参入。

上野物産株式会社

鹿児島県肝属郡肝属町



家業を守るため、 多角的な森林事業を推進

祖父の代から、主に炭の生産販売を九州一円で行っていた林業一家に生を受けた現・上野社長は、平成元年に家業を継ぐために上野物産へ入社。親子二人三脚の経営が7年間続き、平成8年に代表取締役へ就任した。当時、決して順調とはいえなかった経営状況を改善するために取り組んだのは、森林事業に関するさまざまな事業の受注に向けた営業活動であった。

上野社長は大学院卒業後、知人と工業デザインの会社を設立した。しかし、ちょうど30歳を迎えた年に林業の低迷にともない家業を守るためデザイン会社を知人に任せて帰省。その後は国有林生産事業、造林事業、海岸松林の衛生伐など、森林におけるさまざまな事業を受注できるよう会社の技術力・組織力の改善を図りつつ、デザイン会社時代に培った営業力をいかに発揮した。



上野豊社長

「企業がおこなう林業」で イメージアップ戦略を図る

「優秀な人材を確保するためには『暗い林業』や『林家さんの林業』ではなく、『企業が行う林業』いわゆる『機械化システムの林業』を私は目指したいと思いました。子供たちがあこがれる、カッコいい林業をね」。そう語る



SH75X-3B (KESLA 20SH)

上野社長は、企業として地域社会へ出て社会貢献を行う森林ボランティア活動にも取り組んだ。小学校の子供たちと一緒に森林に巣箱を設置したり、森林レクリエーションやゴミ拾い、間伐の実演などを行い、森林の魅力や森林技術への理解を広めつつ、企業のイメージアップを図った。

一方、実務の面では平成10年から12年にかけてグラブソーなどの林業機械を自力で導入し、平成13年には県有林の事業にも参加。「国有林、県有林、市町村有林の森林事業を行うためには、質の高い技術力はもちろん、安全衛生管理をきちんと行える会社でなくてはなりません。そのような、知識と、指導力が必要なんです」。平成14年度からは「緑の雇用制度」として国策による担い手の育成が始まると、積極的に緑の雇用に取り組み、人材の育成に努力した。「当初はコストばかりかかってしまい育っては辞めての繰り返しでしたが、辛抱強く担い手の育成に取り組んで10年。

今では若手で事業班を組織できるようになりました」。現在では国立大学卒の人材が森林の調査や国有林事業を管理し、森林



森林施業プランナーの重田さん

施業プランナーとして民有林の集約にも活躍している。

生産量の拡大を見据え、 機械化の推進を積極的に展開

機械化、IT化、組織化——従来の林業を多角的に改革し続けてきた上野物産。生産量の拡大においては、ストローク式ハーベスタが大きく貢献しているという。「2011年9月に導入したSH75X-3B KESLA20SHは、誰が乗っても確実に枝払いが行える。測尺の正確性も優れていますね」とは、オペレーションを担当する井之上さん。林業歴15年のベテランで機械操作もピカイチだ。上野社長も「構造的に大きな故障が起きにくそうで安心できます」と信頼を寄せる。3年前は約3㎡だった一人あたりの生産性は、現在では約7㎡という勢いで拡大。「地域の森林の現況を考えれば、大径木を処理するもう一回り大きなKESLAが必要になるでしょうね」と、改革の夢はまだまだ終わらない。

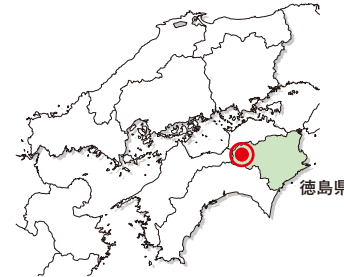


オペレータの井之上さん

その技術は匠の領域へ。 農林水産大臣賞など表彰歴も多数。

木材商 秋田林業

徳島県三好市山城町



労働環境の改善に向け 独自に林業機械を自作

秋田林業の秋田実宣社長は、御年75歳。経営者でありながら今なお林業の最前線で6名の社員をリードし、林業機械を操る技術にはいささかの衰えも見られない。そんな秋田社長は、就林当時を振り返ってこのように語る。「当時は木の伐採も手作業。幹の直径が1mもある大木を斧で何時間もかけながら伐ったものです」。その過酷な労働環境の改善を図るため、昭和50年ごろから独自に林業の機械化に着手。日ごろから懇意にしていた土木建設機械の販売代理店「株式会社 西部」に協力を仰ぎ、自作林業機械の試作を進めた。

住友建機の機械は 足回りの安定感が抜群

「まずはダンボールで型を取って、それをもとに試作を繰り返しました。西部さんには本当に苦勞をかけましたよ」。まだ林業機械が普及していなかった時代。「そんなものに金をかけるくらいなら集材機でも買え」と、同業者の目は冷ややかだったという。以後、秋田林業を追いかけるかのように林業機械は目覚ましい



秋田実宣社長



SH120-5 (KESLA 25SH)

進化を遂げた。平成20年よりKESLA 560SHを駆使する秋田社長は、住友建機の機械についてこのように語る。「林業機械は足回りの安定感が何より大切です。住友建機の機械は駆動力も強いし安定感は抜群。最近では燃費もよくなったし、ベースマシンも格段に進化した」。とくに最新のKESLA 25SHを導入した際には、枝払いのロス少なさと信頼性の向上に機械の進化を痛感。年間の生産量も、1万5千㎡から2万㎡に拡大したという。

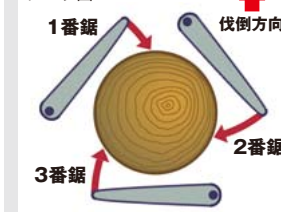
これからも生涯を 森とともに生きる

現在、秋田社長はハーベスタの造材作業を1日に120～130㎡をこなす。その秘訣は林業

機械の進化だけではない。長年の経験により自由自在に機械を操る熟練の技(別枠参照)は、まさに匠の領域である。また、技術だけではなく経営術も高く評価されており、平成23年には農林水産祭参加の「徳島県農林漁業優秀経営者選定事業」において、機械化や生産性の向上により林業経営の効率化を図ったとして農林水産大臣より表彰された。そんな秋田社長を日ごろからよく知る株式会社 西部の元下専務取締役は「秋田さんはまさにこの地域の林業の牽引役ですよ」と語る。その言葉にはにかみながら「山主さんと我々が、お互いに潤っていける林業を追求していきたい」と熱い想いを語る秋田社長は、生涯現役を頼もしく宣言する。

長年の経験に培われた秋田社長の杉伐倒術

イメージ図



3方向からの鋸入れ



直径73cmの大杉を伐倒

KESLA 25SHを使用して直径73cmに及ぶ大杉を伐倒する、秋田社長独自の技を拝見することができた。秋田社長はまず10時の方向から1番鋸を入れ、続いて2時の方向から2番鋸、さらに6時の方向から3番鋸を入れるという3方向からの鋸入れにより、見事に大杉を伐倒した。掛かり木を倒す際も、機械の絶妙な操作で周辺の立木を傷つけずに倒すきめ細やかさ。まさに職人技だ。

※この伐倒術は秋田社長の長年にわたる経験に裏付けられたものです。同様の作業による事故等の責任は負いかねますのでご注意ください。



優良森林が広がる淡海の湖北エリアで、 地域を先駆ける先進林業を展開。

長浜市伊香森林組合

滋賀県長浜市木之本町



間伐支援事業を起点に 地域の林業が活性化

伊香時雨と呼ばれる潤沢な雨雪に恵まれ、優良な樹木が育つことで知られる琵琶湖北長浜地区。適度な湿度をたたえた大地で育つ杉は40～50年で直径40cmに達し、樹高は25mに至るといふ。そのような林業に適した環境でありながら、この地域の林業は数年前まで衰退の一途をたどっていたのだとか。同組合で参事を務める廣瀬茂さんは、当時を振り返ってこのように語る。「もともと林業に対する意識が低かったせいか、多くの山は放置され、持ち主の境界線もわからないような有様でした。せっかく良質な木材が採れるにもかかわらず、この地域の林業は危機的な状況だったのです」。地域の林業に対する危機感が頂点に達しようとしていたとき、この状況の打開に向けた追い風が吹いた。平成19年から始まった間伐支援事業により、滋賀県でも林業活性化への気運が一気に高まったのである。

あらゆる面の「力の強さ」が 導入の決め手

県より支援金の交付を受け、同組合ではただちに林業機械の導入を図った。多くのメーカーの製品が候補に挙がるなか、同組合が選ん



左から川越専務理事、福居組合長、廣瀬参事



SH135X-3 (KESLA 25SH)

だのは住友建機の「SH135X-3 KESLA 25SH」。県下で第1号のハーベスタであった。「他社の林業機械を導入する話がまともかけていたのですが、住友建機さんから熱心にすすめられたプロモーションビデオを拝見して皆の気持ちが動いたんです。木材を持ち上げる力、枝を払う力といった基本的な性能が、映像を見ただけで優れているとわかりました」。実際に操縦するオペレータの谷口さんは、このように評価する。



オペレータの谷口さん



すぐに造材できる点も魅力ですね。木材を振り回すことがないので、狭い場所でも安心して作業することができます。そしてなにより、坂道をぐいぐい登って行く足の強さは本当に頼もしい」。専務理事の川越さんは、谷口さんに「もう1台ハーベスタを追加するならどんな機種がいいか」と尋ねたことがあるという。即座に「これと同じ機械を」と答えた谷口さんの笑顔を見て、正しい判断であったことを実感したという。

間伐の推進により、 すこやかな山を次世代へ

林業機械の導入により間伐事業を推進する以前、同組合では森林の整備を主な事業としていた。間伐も行っていたものの80～90%は外部発注。年間の生産量も600m程度であった。「林業機械の導入をきっかけに間伐の80%以上は直営事業となり、年度生産計画も5000mにまで拡大しています。間伐支援事業により木材の受け入れ態勢も整っていますので、今後は8000～10000mを目標に規模拡大を図っていきたいですね」。廣瀬さんの言葉に深くうなづく福居組合長は、生まれも育ちも長浜市。地元への想いをこのように語った。「最近では林業の先進地として視察団も訪れるようになり、組合員の士気も非常に高まっています。これから適切な間伐を推進しつつ、大切な山を次世代へと受け継いでいきたいと考えています」。

山主との深い信頼関係を財産とし、 能登の地から良質な銘木を全国へ供給。

有限会社 竹田木材

石川県輪島市門前町



地引馬2頭を元手に 弱冠28歳で経営者に

アテと呼ばれる能登ヒバをはじめ、能登スギ、ヒノキなどの銘木が採れることで知られる能登半島。古くから林業の盛んなこの土地に生を受けた竹田社長が就林するきっかけは、ある日突然訪れた。岐阜の繊維メーカーで働いていた22歳のころ、個人で林業を営まれていたお父様が病に倒れ急逝。ただちに帰郷した竹田社長は家業を手伝いながら林業を学び、6年後に28歳の若さで経営を任された。その船出は、いばらの道であったという。残されていたのは2頭の地引馬と多額の借金。ゼロどころかマイナスからのスタートであったが、妻と小さな子供のために歯を食いしばって働いた。転機は就林から10年後の平成3年に訪れた。能登半島全域に甚大な被害をもたらした台風19号により、山林の整備事業が活性化。そのとき、竹田社長のもとに重機を携えたひとりの作業員が「ここで働かせてもらえないか」と訪ねてきたという。地引馬に限界を感じつつも、林業機械など購入する資金のなかった竹田社長はこれを快諾。潤沢な需要に恵まれるなか、会社はまたたく間に業績を伸ばした。



SH135X-3B (KESLA 25SH)

斧のように枝を落とす 力強さに感動して

林業機械に可能性を見いだした竹田社長は、地域に先駆けて機械化を推進した。やがて県内屈指の素材生産業者に成長した竹田木材。会社の再建という使命を果たした竹田社長は、子供たちが自立したところには引退も考えたという。しかし、いまだ叶わぬ夢があった。「いつかはハーベスタを導入したかったんです。一昨年、県森連で住友建機のデモ機を見せてもらったのですが、斧のように枝を落とす力強さや、油圧ホースがスッパリとしていて故障の少ないような構造に一目惚れしてしままして。「これだ!」と思いましたね」。そして平成22年11月、SH135X-3B KESLA 25SHを導入。新型の1号機であった。現在、オペレータを担当するのはご子息の健一さん。自衛隊員の経歴を持つ抜群の運動神経で、すでに手足のように操る。「乗り始めてまだ半年足らずですが、操縦しやすいので慣れるのは早かったですね。それと、伐採から集材まで1台でこなせるのでグラップルを使う手間が省ける。コストや手間の削減にも貢献してくれていますよ」。



竹田社長夫妻

お客様本意の理念で 厚い信頼関係を構築

竹田木材が主に扱うのは、能登が誇る数々の銘木。ストローク式のSH135X-3B KESLA 25SHは樹皮を傷めることが少なく、木材の品質を損なわない点も魅力だという。同社が品質にこだわるのは利益のためだけではない。「得た利益をもとに、新たな山や樹を少しでも高い値段で購入することで、山主さんへ還元したいと考えています。林業は山あつてのものですから」。利益の還元だけでなく、購入した樹を伐るために山へ入ったら、きれいに掃除してから出るように心がけているのだとか。「山主さんにとっても我々にとっても、山はかけがえのない財産。当たり前のことをしているまでです」。そう語る竹田社長と奥様のもとには絶大な信頼が集り、結果、良質な銘木が集っているという。



ご子息の健一さん



森林にとって最良の林業を追求したい。 原動力は、山と人への深い愛情。

神子沢林業

山梨県山梨市東



林業の楽しさに目覚め、 父親の愛した山へ

20名のスタッフを束ねる神子沢社長は、異色の経歴の持ち主だ。19歳で自衛隊へ入隊し、21歳からトラックの運転手と林業を兼業。29歳のときに本格的に林業に取り組むことを決意し、神子沢林業を2人のスタッフとともに立ち上げた。当時のいきさつをこのように振り返る。「19歳のときに林業家だった父親が他界したのですが、自分は林業を継ぐ気がなかったんです。それでもトラックの運転手をしながら冬場だけ山に入ったら、いつの間にか楽しくなっちゃって(笑)」。

山梨県はアカマツが豊富な地域として全国に名を馳せる。神子沢林業でも、この樹種に対するこだわりは強い。「アカマツのチップからは品質の高い紙をつくることができる。埋蔵量もスギより多いくらいだから、将来的にもやりがいのある樹です」。しかし、アカマツは総じて幹の曲がり強く、造材は一筋縄ではいかない。かつてはすべての木材の枝払いを、チェーンソーにより手作業で行っていたという。



神子沢春男社長

雇用の面からも 林業の在り方を変えていく

造材の効率化に向けて、神子沢社長はデモやリースを通じて数多くの林業機械をテストした。ハーベスタ、プロセッサなど、その数は20機種を超えるという。「いろいろ試した結果、曲



SH120-3 (KESLA 25SH)

がった幹や太い枝の樹にはストローク式がいいと確信しました。うちでは3年前からハーベスタはKESLA一筋です」。現在、神子沢林業ではSH120-3 KESLA25SHが稼働しており、神子沢社長をはじめ4名のスタッフがオペレーションを担当する。そのなかの一人が石川さん。なんと女性のオペレータだ。「林業に携わって3年ほどですが、機械化のおかげで女性でも活躍できる可能性が広がったように思います。女性に働きやすい環境をつくってくれている社長にも感謝です」。



オペレータの石川さん

やる気さえあれば性別は関係ないと語る神子沢社長。今では20名のスタッフのうち3名が女性で、将来的にはさらに増やす意向だという。「最近では女性を採用する同業者も増えてきています。安全面にさえ留意すれば、女性だからダメということはありません。そういった雇用の面からも、林業の在り方を改革していきたい」。

自分の山を持ち、 自分の想い描く山を育てたい

独自の理念で新しい林業を模索する神子沢社長の根底にあるのは、山が好き、人が好きという純粋な想いだ。「どんなに機械が進化して

も、いちばん重要なのは人間。毎年フォレストワーカー研修に3~4名のスタッフを派遣するなどして、人材育成に力を入れています」。また、将来の夢をこのように語る。「いつかは自分の山を持って、自分の好きなように山を育てたい。豊かな山を育てるには、皆伐して萌芽更新を促すという手段もある。現在、息子名義で30haほどの森林を保有しているのですが、親子2代に渡って理想の林業を追求していけたら幸せですね」。

SH120-3 KESLA25SHの導入以来、生産量が1万㎡から2万㎡に倍増したという神小沢林業。山への深い愛情を原動力に、これからも活躍の場を広げていくことだろう。そして、そんな同社の面々に手を入れられた山々は、きっと幸せに違いない。



次世代へ林業のさらなる発展を託して。 山を守り、樹を育むための取り組みを推進。

株式会社 よつばフォレスト 有限会社 浅野産業

北海道稚内市



稚内の森林と向き合いつつ 目線は日本全体の林業へ

日本最北端の地、北海道稚内市。この地域の樹木にはひとつの共通点がある。太い枝だ。強い海風に煽られる樹々は、高く育つことよりも太く育つことを選び、独特の枝ぶりになるという。そんな特徴的な樹木と60年以上に渡って向き合ってきたのが、(株)よつばフォレストの美田社長。稚内の林業の難しさについて、このように語る。

「列状間伐は、残す樹々の間隔を4.5~5mに保つことが大切。広すぎても狭すぎても成長率の低下につながる。大きい林業機械ではこの間隔が6mに広がってしまい、小さい機械じゃ力が足りない。ここが機械選びの悩みどころなんだ」。さらに、地域の8割を占めるトマツにも厄介な特性があるのだとか。「樹液が表面に上がってくる6月までは、樹皮が滑ってしまい機械で正確な測尺ができなくなる。冬の凍結した樹より滑るから手に負えない」。自ずとストローク式ハーベスタへの関心が高まり、現在はKESLAの導入を検討中とのこと。「業務提携している浅野産業では、すでに1台稼働しているからね。オペレータからの評価も高いし、前向きに考えているよ」。稚内、ひいては日本全体の林業を憂慮する美田社長は、このように締めくくった。「今のままでは、あと30



よつばフォレスト 美田和三郎社長



SH135X-3B (KESLA 25SH)

年で天然材が採れなくなる。地域、気候、風土に応じた“適地適材”の推進により、日本の美しい森林が守られていくことを願っています」。

伐倒、枝払い、玉切りを1台で 安全性の向上にも貢献

浅野産業では、2011年3月にSH135X-3B KESLA25SHを導入。伐る樹より残す樹に配慮し、1伐3残の列状間伐に取り組んでいる。同機を操縦するのは、浅野産業の二代目を担う浅野武雄さん。たった一人で山へ入り、伐倒、枝払い、玉切りまでを見事な技術で行う。「どんなに狭くて急な傾斜地でも、機械さえ入っていれば玉切りまでできる。8cmくらいまでの枝なら確実に払えるし、作業効率も飛躍的に向上しました」。以前は機械で払えない枝をチェーンソーで伐るため、1日に何十回も機械から下りることがあったという。「無段階チルト機能を活用することで伐倒方向を決めやすいことも大きなメリットですね。この地域は風が強いので、上りの傾斜地では伐った樹が



浅野産業二代目の武雄さん

こちらに戻されてしまうこともある。安全性の向上にも貢献していると思います」。一方、樹皮が滑る時期の測尺を正確に行えないという課題も。「本州には事例のない、北海道特有の症状のようですね。もうすぐ対応済みのパーツが仕上がるので楽しみにしています」。

これからの林業のために すこやかな森林を次の世代へ

SH135X-3B KESLA25SHの最大の魅力は“残した樹々を傷つけないこと”と語る浅野さん。「ストローク式は枝払いの際に勢いをつけたりアームを左右に振り回す必要がないので、残した樹を傷つけにくい。傷がつくとそこから腐り、パルプ材にしかならないような価値の低い樹になってしまうんです。次の世代のためにも、そういう樹は少しでも減らさなければいけません」。よつばフォレストと浅野産業が志をともにして邁進するかぎり、稚内の林業の未来は明るい。